

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 14 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520293

研究課題名（和文）「在外ドイツ人研究」の制度化と禁忌化

—マイノリティ論から見たゲルマニスティーク—

研究課題名（英文）“Expatriate German-Studies”：Its Institutionalization and Taboo.
—“German Studies” Reconsidered from the Viewpoints of Minority Studies—

研究代表者：

藤田 恭子 (FUJITA KYOKO)

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：80241561

研究成果の概要（和文）：

ドイツ・ナショナリズムの興隆を背景に、ドイツやオーストリア、スイスの国境外に居住する「在外ドイツ人」の存在は、血統主義的に考えられた「民族ドイツ人 (Volksdeutsche)」の「文化的前哨」という政治的機能を負った。そのため、「在外ドイツ人研究」は広範な分野で制度化されたにもかかわらず、第二次世界大戦後は一転して禁忌化され、研究成果は当該マイノリティ内部を除いて歴史の闇に葬られた。

本研究では、ゲルマニスティーク（ドイツ語ドイツ文学研究）を中心に「在外ドイツ人研究」の資料を再発掘し、その学術的意義を検証した。また、上記の政治的機能の影響を当該マイノリティが置かれていた政治的、社会的文脈をも踏まえて再検証した。

研究成果の概要（英文）：

Against the backdrop of the flourishing nationalism, "the expatriate Germans", the Germans living out of Germany, Austria and Switzerland, took a political role as "a cultural outpost" of ethnic Germans. Because of these political functions, the so-called "Expatriate German-Studies" was energetically institutionalized as an interdisciplinary field. After the end of the World War II., however, it was made taboo, and its academic achievements were erased from history. Our research team collected and unearthed many materials and historical records about this academic field, especially its literary and linguistic branch, and reconsidered its academic achievements. In addition, we considered its political influence based on the political and social background of the ethnic German minorities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ系文学

キーワード：マイノリティ、ナショナリズム、ナチズム、ルーマニア、ユダヤ、在外ドイツ人、文化政策、外交

1. 研究開始当初の背景

2009年度ノーベル文学賞を受賞したヘクタ・ミュラーは、ルーマニアのドイツ系マイノリティ出身である。彼女のようにドイツやオーストリア等主要ドイツ語圏の外に居住しドイツ語を母語とするドイツ系マイノリティを指す用語としてかつて広く用いられていたのが、「在外ドイツ人」を意味する *Ausland(s)deutsche* あるいは *Ausland(s)-deutschtum*, *das Deutschtum im Ausland* 等の語だった。

これらの語は、第二次世界大戦終結までは広範な学術分野における鍵概念だった。人文科学や社会科学から植物学等の自然科学まで、様々な分野で「在外ドイツ人」やその居住地に関する研究が行われた。とりわけゲルマニスティック（ドイツ語ドイツ文学研究）は早い時点から「在外ドイツ人」の存在に注目していた。1846年に開催された第1回ゲルマニスト会議の席上、歴史学者ラッペンベルクは「外国におけるドイツ人の拡散状況」について報告し、「ドイツ国外や他の大陸においても言語や慣習における彼らの国民性を保持すべく援助する必要性」を説いて大いに賛同を得た。「在外ドイツ人」は、血統的共通性を前提としたうえで言語や文化に民族への帰属の証を見るドイツ・ナショナリズムを背景に注目されたのである。

ドイツの「文化的前哨」という政治的機能を備えた「在外ドイツ人」に関する研究はナショナリズムの興隆とともに、積極的に制度化された。1840年代から約100年にわたり多数の雑誌が刊行され、また在外ドイツ人を支援する諸団体も多数設立された。1917年にはシュトゥットガルトに「ドイツ外国博物館兼研究所 在外ドイツ人学および国外ドイツ権益保護のための博物館兼研究所 (*Deutsches Ausland-Museum und Institut. Museum und Institut zur Kunde des Auslanddeutschtums und zur Förderung deutscher Interesse im Auslande*)」が、翌年にはマールブルク大学に「国境隣接地域在住および在外ドイツ人研究所 *Institut für Grenz- und Auslandsdeutschtum*」が開設された。1930年代には、在外ドイツ系マイノリティのリーダー的人物がドイツの大学から名誉博士号を授与される例が多々見られた。ゲルマニスティックの代表的成果としては、ウィーン大学教授ハインツ・キンダーマン編『国境を越える声 — 文学にみる国境隣接地域在住および在外ドイツ人の容貌と生存圏 — (*Rufe über Grenzen. Antlitz und Lebensraum der Grenz- und Auslandsdeutschen in ihrer Dichtung, 1938*)』やルーマニアのクルージュ大学教授カール・クルト・クラインによる大著『在外ドイツ人文学史

(*Literaturgeschichte des Deutschtums im Ausland, 1939*)』等を挙げることが出来る。また、各居住地域のドイツ語方言も熱心に研究された。

しかし、「在外ドイツ人」は「民族ドイツ人 *Volksdeutsche*」という血統主義的観念と不可分の関係にあったため、第二次世界大戦後、特に西ドイツでは、この分野の研究は用語も含め、一転して禁忌の対象となった。戦前に設置された研究機関は解体・再編され、マイノリティの文化や言語を学術研究の形で記憶に留める作業は、主に同郷人会系諸組織内で細々と行われたが、学術的評価は得難かった。禁忌が緩み、同郷人会系諸研究所が大学の附置研究所として再編され始めるのは、2003年以降である。

上記のような禁忌の働きは現在もなお強く働いており、戦後の主要ドイツ語圏諸国では現在に至るまで包括的研究はない。ドイツ統一後、当時の学術機関に関する著作が数例刊行されたが、史学および外交史研究であった。ゲルマニスティックでは、アレクサンダー・リッターが1985年に問題提起をし、90年代以降もオーストリアのイデオログであったキンダーマン等について批判的論考を数編発表しているが、マイノリティ側の視点は顧みられていない。逆にマイノリティ側の著作には、批判性を抑制しているものも多い。

本研究の代表者および分担者は1996年以来、ルーマニアのドイツ系およびユダヤ系ドイツ語話者マイノリティの文学と取り組んできた。その間、ルーマニアに関する「在外ドイツ人研究」やルーマニアにおけるゲルマニスティックの歴史の一端に触れ、「在外ドイツ人研究」を主要ドイツ語圏のみならず、当該マイノリティや彼らの居住地の視点からも検証する必要を認識した。

2. 研究の目的

本研究では、戦後、禁忌の対象となった「在外ドイツ人研究」についてゲルマニスティックを中心に資料を再発掘し、その活動と成果に関する事実を整理する。そのうえで、イデオロギー性と政治的機能への批判性を保持しつつ、それらの活動や成果をマイノリティの視点から再検討する。

事例として両次大戦間期にルーマニア領であった地域に着目し、この地域に関する研究やこの地域出身の研究者の活動について詳細な検証を行う。とりわけ実証的研究について、学術的評価の可能性を再検討する。

「在外ドイツ人研究」はドイツやルーマニアにおけるゲルマニスティックの歴史に足跡を残したにも関わらず、戦後は検証の対象とすることさえ否定され、結果として「ドイツ文化」という概念から多様性を削ぐ方向に働いた。「在外ドイツ人研究」に光をあて、その多様な側面を解明することで、ゲルマニスティックの研究史に潜在する別の相貌を提示する。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、(1)から(5)までの手順を踏んで分析と考察を進めた。

- (1) 「在外ドイツ人研究」一般およびルーマニアのドイツ系マイノリティ出身者の研究に関する資料・情報の収集と整理。
- (2) 当該研究の実証性を中心とする学術的意義の検討。
- (3) 当該研究の政治的機能の分析。
- (4) ドイツ・オーストリア内部のイデオログとの比較。
- (5) ゲルマニスティック研究史における位置づけ。

(1)に際し、研究代表者の藤田が主にルーマニアからドイツ・オーストリアに移って活動した研究者を扱い、とりわけリヒャルト・チャーキ(トランシルヴァニアの現シビウ出身で、シュトゥットガルトの旧「ドイツ外国博物館兼研究所」長)を中心に、また分担者の鈴木がルーマニアのクルージュ大学(どいう名はクラウゼンブルク大学)独文科の歴代教授、特にカール・クルト・クライン(1897-1971)について現地調査を行った。そのうえで、調査結果を持ち寄って議論を重ね、(2)～(5)の手順で検証を進めた。

4. 研究成果

研究計画に基づき、「在外ドイツ人研究」一般およびルーマニアのドイツ系マイノリティ出身研究者に関する資料・情報の収集と整理を行うとともに、これらの資料をもとに、実証性を中心とする学術的意義を検討した。

資料の収集と整理という点では、大きな成果があった。ルーマニアやドイツで刊行された著作や定期刊行物を数多く収集し、この分野において必要な一定程度の研究基盤が整った。なかでも、シュトゥットガルトのドイツ外国博物館兼研究所から刊行された雑誌「在外ドイツ人(Der Auslanddeutsche)」とその後継誌(1918-1944)全巻やマールブルク大学に設置された国境隣接地域在住および在外ドイツ人研究所から刊行された叢書類を入手し、またクルージュにあるバベシュ=ボ

ヤイ大学独文科図書室に収蔵されているk. K. クラインの蔵書類、いわゆるカール・クルト・クライン文庫の内容を確認できたことは重要な成果であった。

研究の実証性と政治性に関する事例研究として K. K. クラインの学術的業績を検証したが、それは彼の業績とその業績に対する従来の評価に「在外ドイツ人研究」に見られる典型的傾向が見られたためである。

クラインは 1921 年に博士号を取得しルーマニアのトランシルヴァニア地方(ドイツ名はジーベンビュルゲン地方)の古都シビウのドイツ語ギムナジウム教員となった後、故郷であるトランシルヴァニア地方のドイツ文学史を丹念に追い、ルーマニア統治下のマイノリティとなった故郷の同胞たちの足跡を歴史に留めるための記述的研究に力を注いだ。しかしクルージュ(ドイツ名はクラウゼンブルク)大学独文科正教授となった 1939 年に刊行された『在外ドイツ人文学史』において記述対象を劇的に拡大し、ドイツやオーストリア、スイス国境外の広範な地域に居住するドイツ系ドイツ語話者による文学営為を網羅すべく努めた。時代的には中世から同時代に及んでおり、地域としては、クラインの知悉するルーマニアやポーランド等東ヨーロッパ地域のみならず、バルト海沿岸諸国やロシアから南北アメリカ大陸各国に至る。クラインはこれらの膨大なデータを整理し、時代思潮や地域の特性も踏まえて記述している。ドイツやオーストリア等の国境に縛られることなく、ドイツ語による文学営為をその拡がりにおいて捉えた点で特筆すべき業績ではあるが、ドイツ語話者を血統主義的な意味での「民族ドイツ人」と等置している点で偏りがあり、結果的にはナチ政権の思惑に大いに迎合することとなった。

クラインは 1944 年にルーマニアを追われた。ドイツにあった「在外ドイツ人」に関わる諸研究施設は一部を除いて閉鎖され、特に大学から、この研究分野は完全に締め出された。クラインは紆余曲折の後にオーストリアのインスブルック大学にポストを得て、ドイツ語学の研究に従事することとなった。彼が監修した『ジーベンビュルゲン・ドイツ人の言語地図(Siebenbürgisch-Deutscher Sprachatlas)』(1961)は厳密かつ詳細を極めた実証的学術業績であり、これによって、かねてモーゼルフランケン方言地域から入植したことが指摘されていたトランシルヴァニアのドイツ系住民、いわゆるジーベンビュルガー・ザクセン人の出自が細部に至るまで明らかにされた。それに基づくトランシルヴァ

ニアのドイツ人移民史研究の集大成『トランシルヴァニカ(Transsylvania)』(1963)は、この分野での研究成果としては今日なお乗り越えられていない。しかし戦後のドイツ語圏において出版に対する妨害があったわけではないが、クラインの巨大な業績は、当事者であるジーベンビュルガー・ザクセン人同郷人会関係者や関係機関を除いて受けるべき賞賛を得ることもなく、むしろ少数の声高だがむなしい反論が目につくに過ぎなかった。クラインの研究が時流に乗ったものではなかったとして片付けるとしてもあまりに不自然な、しかしだれかが主導したわけでもない過小評価が、「在外ドイツ人研究」の第一人者に対して厳然と行われたかのように思われる。

しかし前述のように、もっともナチ政権の文化政策への接近が目につく『在外ドイツ人文学史』であっても、少なくともそこに詳細に記された広範な範囲の「在外ドイツ人」たちの文学営為の記録自体は、ナショナリズムの文脈から距離をとって読む限りにおいて、従来の「国民文学史」としての「ドイツ文学史」の枠を突き破り、その枠を相対化する可能性をも秘めている。ただしその場合、ドイツ語話者という概念を血統主義的な意味での「民族ドイツ人」概念から切り離し、言語を中心とするより広範な概念として確立した上で大幅に補筆し、クラインの業績を徹底的に相対化する必要がある。

クラインの学術的業績が受容において一方的称揚と否定との間で正当に評価されなかった背景には、「在外ドイツ人研究」が、その担い手の多くを占めていたドイツ系マイノリティ出身研究者たちのマイノリティ側に立つ問題意識と、受容者として想定されている者たち、特にドイツ・オーストリア国内のマジョリティの意識との懸隔に悩むなかで、やがてナチ政権によるドイツ拡張政策に利用されていった歴史がある。それがもっとも顕著であった例を、前述したシュトゥットガルトのドイツ外国博物館兼研究所の運営に見ることができる。1917年設立の背景には、第一次世界大戦の戦況をも踏まえ、ドイツやオーストリア政府の統治が及ばなくなった地域のドイツ系住民を支援しようとの意図があった。しかしこの場合の「ドイツ系」とは血統主義的側面が強まっていたとはいえ、必ずしも厳密に線引きされたものではなく、ドイツ外国博物館兼研究所を切り回した初代事務局長フリッツ・ヴェルトハイマーはユダヤ系だった。しかしヒトラーによる政権奪取後の1933年3月、ヴェルトハイマーはナチ突撃隊により自宅搜索を受け、職場から排除された。同年7月23日にジーベンビュルゲン出身のリヒャルト・チャーキが新任の館長兼所長として着任する。チャーキは着任

以前、ルーマニアのドイツ系マイノリティ、特にジーベンビュルガー・ザクセン人の文化の保護に尽力していた。1916年刊行のアンソロジー『森の向こうで ゴーベンビュルゲンのドイツ文学 800年(Jenseits der Wälder : eine Sammlung aus acht Jahrhunderten deutscher Dichtung in Siebenbürgen)』等、ジーベンビュルゲンのドイツ語文学に関わる複数の著作があり、故郷がルーマニア領となった後は文化雑誌「東方の国 在外ドイツ人の精神生活について(Ostland. Vom geistigen Leben der Auslandsdeutschen)」(1926-1931)の編集刊行等を通して、マイノリティとなったドイツ系住民の精神的紐帯強化に努めていた。しかし博物館兼研究所への着任後は、言論統制の下で党と政府との良好な関係を保ちつつ組織運営を図ろうとし、マイノリティ当事者の立場からの活動は背景へと沈んでいったのである。

本研究を通し、「在外ドイツ人研究」から生み出された実証的・記述的研究に光をあて、いくつかの事例に関してはその可能性と限界を検証することができた。整備することができた研究基盤を活用し、今後とも、「在外ドイツ人研究」をめぐる諸問題の考察を進めていく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①藤田恭子「コミュニティの破綻とマイノリティ文化の再編—東欧革命後のルーマニア・ドイツ語文学—」、奈倉洋子編『ドイツ語圏文化の現在—ベルリンの壁崩壊・東欧革命後20年の変化を読む—』(日本独文学会叢書080)、日本独文学会、2011年、4-18頁。
- ②藤田恭子「《周縁》からの声の行方—『ぶな—ブコヴィナのドイツ語ユダヤ文学アンソロジー—』出版をめぐって」、『ドイツ文学』第9巻第2号、日本独文学会、2011年、227-235頁。

[学会発表] (計3件)

- ①藤田恭子「多民族国家の解体と『ドイツ人』意識の変容—兩次大戦間期ルーマニアにおけるユダヤ系およびドイツ系ドイツ語話者を事例に—」、第29回日本ドイツ学会シンポジウム「領土とナショナリティー」、2013年6月22日、お茶の水女子大学(予定)
- ②藤田恭子「ルーマニア・ドイツ語文学概説—その歴史と現在における『多様性』

について—」、日本オーストリア文学会、
2011年6月5日、日本大学

- ③藤田恭子「コミュニティの破綻とマイノリティ文化の再編—東欧革命後のルーマニア・ドイツ語文学—」、2010年度日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム「ドイツ語圏文化の現在—ベルリンの壁崩壊・東欧革命後20年の変化を読む—」、2010年10月6日、千葉大学

[その他]

- ①藤田恭子「トランシルヴァニア案内—知られざるドイツ語文化都市シビウ—」、郁文堂『Brunnen』第476号、2012年、6-9頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 恭子 (FUJITA KYOKO)
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：80241561

(2) 研究分担者

鈴木 道男 (SUZUKI MICHIO)
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：20187769